



津島市民病院
外科医師 和田 幸也

腹腔鏡による鼠径ヘルニア手術

鼠径ヘルニアとは？

「鼠径」とは足の付け根の部分のことを指します。「ヘルニア」とは、ラテン語で突出という意味で、体内の臓器が本来あるべき場所から飛び出した状態を指します。つまり「鼠径ヘルニア」とは、足の付け根が膨らんできて腫れる病気ということになります。いわゆる「脱腸」と同じ病気です。本来ならお腹の中にあるはずの腸や腹膜の一部が、筋肉の間のトンネルから皮膚の真下に出てくる良性の病気です。

鼠径ヘルニアの症状は？

足の付け根に柔らかい膨らみができます。常に膨らみのある状態のこともあります。立ち上がった状態やお腹に力をかけた状態のときに膨らむだけのこともあります。足の付け根の違和感や痛みで気づくこともあります。この膨らみが硬くなり、押さえても戻らない場合は嵌頓といい、トンネルに腸がはまりこんでしまった状態のことを指します。この場合は緊急での手術が必要になることがあります。

鼠径ヘルニアの原因は？

乳幼児期にみられるものは先天的なものです。成人になってから認められるものは加齢によって身体の組織が弱くなるのが主な原因です。お腹に力がかかった時に、弱くなった筋肉の間のトンネルから腸や腹膜が脱出てきます。鼠径ヘルニアの患者さんの80%以上が男性で、特に50歳代以降に多くなります。立ち仕事の人、お腹に力がかかる仕事の人、肥満の人、便秘症の人は特になりやすいとされます。

鼠径ヘルニアの治療は？

鼠径ヘルニアを治すには、手術をするしかありません。手術ではトンネルの入口をふさぎ、弱くなった部分を補強する方法をとります。鼠径ヘルニアの手術は昔から現在まで様々な方法が考案されてきました。最近では、膨らみの部分を直接切開して治す従来法とは違い、腹腔鏡を使った手術が盛んに行われるようになってきました。

腹腔鏡による鼠径ヘルニア手術とは？

腹腔鏡を使う場合は、へそからお腹の中に入れたカメラで観察しながら、お腹の内側から手術を行います。お腹の内側から弱くなったトンネルの部分に人工のメッシュを縫い付けてトンネルをふさいでいきます。この腹腔鏡による手術の利点は主に3つあります。

- ① お腹の創きずが小さい:従来法では膨らみの部分に約5cmの創が必要でしたが、腹腔鏡を使うと臍に1cmの創と、臍の左右に5mmの創が2か所(合計で2cm)の小さな創だけで手術可能です。両側の鼠径ヘルニアの場合もこの2cmの創だけでできます。
- ② 術後の痛みや違和感が少ない:創が小さいことと、膨らみの部分を直接切開する必要がないことが理由です。
- ③ お腹の中からの確実な診断と治療ができる:お腹の内側から直接観察できるため、小さな鼠径ヘルニアを確実に診断でき、トンネルを直視して確実な治療をすることができます。

腹腔鏡による手術は1時間半程度の全身麻酔の手術になります。従来法と同じく2泊3日入院での手術が可能です。お腹の手術をしたことがある人、全身麻酔をかけられない病気のある人は腹腔鏡による手術を行えない場合もあります。

当院では痛みや違和感の少ない腹腔鏡による鼠径ヘルニア手術を積極的に行っています。治療のご相談は平日毎日受け付けておりますので、どうぞお気軽に受診してください。

